理工学部生としての體育會	體育會航空部副将　伊豆田修祐

1.　はじめに

慶應義塾大学理工学部創立 75 年という節目の年を迎えるにあたり、理工学部体育会 75 年史に慶應義塾体育会に所属する理工学部生を代表して寄稿させて頂けることを大変光栄に思う。私は理工学部生が中心となって活動を行っている理工学部体育会ではなく、全学部生が集まる慶應義塾体育会に所属して活動を行っている。本稿では、私が所属している慶應義塾体育会航空部に焦点をあて、その特色や活動を通して感じたことを論じたい。その際に、慶應義塾体育会に属する各部はそれぞれに特色があるため、私が航空部という組織を通して体験した体育会に関する事象が、他部から見ると異質に感じられてしまうところもあるかもしれない。しかしながら、活動方法の違いはあれども、その意義に関しては大きな違いは無いと信ずるので、この点に関してはご容赦いただきたい。

図 1　離陸上昇中のグライダー

図 2　上昇気流を捕えて上昇中のグライダー

2.　航空部とは

ほとんどの人にとって航空部という組織はなじみが無く、鳥人間やスカイダイビングに誤解されてしまうことが多い。そのため、まずは航空部がどのような活動を行っているかについて説明したい。

航空部はグライダーという航空機を操縦・運用する部活である。グライダーは簡単にいうと、エンジンを搭載していない航空機のことである。そのため自力では離陸することができず、飛行機やウィンチと呼ばれる機械に引っ張ってもらうことで離陸上昇を行う。そしてある一定以上の高度に達すると、その機械から離脱し、自由に空を飛びまわることができる。他の航空機にはできないグライダーだけの特徴として、上昇気流を捕まえれば、エンジンが無くても上昇することができ、自然の力だけを用いて高高度・長距離の飛行を行えることが挙げられる。部員のほとんどはグライダーを大学から始めるが、訓練を積むことによって 4 年生になるころには一度の飛行で 5 時間以上も飛びつづける技量にまで上達する。

もちろん航空部は慶應義塾のみに存在する部活ではない。日本学生航空連盟には 59 の加盟校があり、他の競技と同様に六大学戦や全国大会といった競技会も毎年開催されている。競技内容は 24km や 39km のコースをいかに早く周回するかというレース競技である。グライダーはエンジンが無いという特性上、上昇気流を用いて高度を稼がないと飛行を継続することができない。そのため、強力な上昇気流を選別し、他機よりも早く上昇できるかどうかが勝敗を分けるカギとなる。大会ではほんの数秒差で順位が入れ替わってしまうことも珍しくないので、選手には高度な技術と冷静な判断力が求められる競技である。

3.　航空部における慶應義塾と藤原工大

3.1　慶應義塾航空部の成り立ち

1930 年(昭和 5 年)、航空部の前身である航空研究会が慶應義塾に創設されたのが航空部の始まりである。チャールズ・リンドバーグによる大西洋単独無着陸飛行が 1927 年(昭和 2 年)に達成されたばかりで、空への憧れと期待がますます高くなる時期での創設だった。当時は今のような体育会としてではなく文化団体連盟に所属していた。現在の航空部の活動はパイロットとしてグライダーを操縦することに主眼を置いているが、当時は操縦だけではなく飛行理論や航空機の設計・製作といったエンジニア的な活動も主として行われていた。訓練は新丸子にある丸子多摩川滑空場や江東区にある洲崎飛行場というところで行われていた。現在は訓練のために埼玉県の熊谷まで行かなければならないため、日吉に近い滑空場で訓練を行うことができた当時の環境はとてもうらやましく思われる。さらに長期休暇時の合宿は長野県の霧ケ峰や茨城県の石岡など、全国の飛行場や滑空場で積極的に活動していたようである。また当時から他大学の航空研究会との交流も活発に行われており、法政大学等と合同で訓練を行うだけではなく、1936 年(昭和 11 年)には複数の大学と合同で日本と満州の往復 2600km を飛行したとの記録も残っていて、当時の航空に対する意識の高さがうかがえる[1,2,3,4]。

3.2　藤原工業大学航空研究会の成り立ち

1939 年(昭和 14 年)、慶應義塾大学理工学部の前身である藤原工業大学が誕生し、藤原工業大学にも航空研究会がつくられた。このとき、慶應義塾航空研究会が藤原工業大学の開校式に祝電を送っていることが藤原工業大学開校記念誌に記されている。当時の藤原工業大学航空研究会の活動について、1941 年(昭和 16 年)刊行の藤原工業大学予科誌創刊号に記載されている。当時の部員の航空研究会に対するモチベーションとして「日本の将来を背負う優秀なる技術者たるには、今からその方面に対する準備、研究が必要だ」と述べられており、航空研究会の活動を航空技術者になるための重要な準備段階としてとらえていることが分かる。グライダー操縦と航空機エンジンの分解組立の二つの活動をしていた。グライダーの操縦は、慶應義塾航空研究会員として行っていた。活動内容は後者に重きがおかれ、羽田の学連格納庫での発動機の分解組み立て実習を日常的に行っており、夏季休暇には各務ヶ原陸軍飛行学校で技術的な訓練を計画するなど、技術的な面の学習・実践を活動の主眼においていたことが分かる[5,6]。

3.3　戦乱の中、慶應義塾大学工学部へ

1944 年(昭和 19 年)8 月 5 日、藤原工業大学は慶應義塾大学に統合され、工学部となった。しかし時は第二次世界大戦の真っただ中で、太平洋での戦局がますます悪化している時期である。1940 年(昭和 15 年)に民間航空に関する団体は大日本飛行協会に統合され政府の統制下に入り、各大学航空研究会も軍事色が強くなっていた。統合の前年から大学の学生は卒業まで兵役に就くことを猶予されていた制度が文科系の学生には撤廃された。そのため当時の学生の多くが大学生活の途中から戦場へと旅立たねばならなかった。特に航空機搭乗員の養成は陸海軍を問わずに急務となっていたため、学生時代から操縦練習を行っている航空研究会の学生は貴重な人材であった。慶應義塾に限らず、各大学の航空研究会出身で陸海軍の航空機操縦士となり戦死された先輩方は決して少なくない。そして 1945 年(昭和 20 年) 8 月 15 日、日本は敗戦し、GHQ（連合軍総司令部）により一切の航空に関する活動が禁止されてしまう。そのため航空研究会も活動の停止を余儀なくされてしまうのである[1]。

3.4　戦後

戦後禁止されていた航空活動も、1951 年(昭和 26 年)に航空禁止令が解除されるとともに再開された。これと同時に慶應義塾航空研究会は航空研究クラブと名前を変え、復活を果たした。航空研究クラブは精力的に活動を行い、自らが中心となって設計・製作したグライダーで複座滑空機の獲得高度日本記録達成などの輝かしい業績を上げ

る。そして、1969 年(昭和 44 年)に正式に慶應義塾体育会に加盟し、名称も慶應義塾体育会航空部になった。これ以降航空部は最新鋭の機体・機材を運用するなど、日本滑空会をけん引する存在として発展を遂げてきた[1,3]。一方、工学部においても航空研究会が存在していたことが、1954 年(昭和 29 年)卒業の 12 期生のアルバムに、写真として残されている。

4. 体育会活動

4.1 大学におけるスポーツ

小学校から高校に至るまで、学校の運動部に所属してスポーツをしてきた人は数多くいるだろう。それにもかかわらず、大学で体育会に所属してスポーツに励む学生は、それらと比較すると非常に少ない。しかしながら多くの大学生は体育会には所属しないが運動サークルに所属してスポーツを行うため、スポーツに対する興味・関心を失ってしまったわけではない。それではなぜ多くの人が体育会活動を敬遠してしまうのだろうか。それは大学生活におけるその他の活動と比較して、体育会の活動が紛れもなく最も「厳しい」からである。どの競技であろうと、練習時間の長さによる肉体的な厳しさ、先輩や指導者の指導による精神的な厳しさ、そして部員の競技レベルの高さによる競争の厳しさは体育会が紛れもなく筆頭である。

それではなぜ体育会は創設から長い間、他団体に比べてこれほどまでに「厳しさ」を維持し続けることができるのだろうか。それはいかなる競技であろうと体育会所属の部に「勝利」を得なくてはならない使命があるからではないかと私は考える。体育会は楽しむためにスポーツをする場では無い。もちろん、ほとんどの学生はその競技が好きで体育会の所属することを決めことは間違いないが、練習の厳しさの余り、その競技が嫌いになってしまう時期すらある。野球部のように卒業後、プロ選手として活躍しようと考えている学生であるならば、そのような厳しい練習に打ち込むのもうなずけるが、ほとんどの学生は体育会に所属しているからといって、その競技で身をたてていくつもりはないだろう。それでも厳しい練習を続けるのは、その厳しさを乗り越えた者にしか勝利の栄光は訪れないと選手は信じているからであり、敗北してしまうことはその厳しさに耐えることよりもよりも辛いからである。

そして、この「勝利にこだわる」ということと「厳しさ」が学生を大きく成長させるのだと思う。

4.2 勝利へのこだわり

このように書いてしまうと、もしも敗北してしまったら体育会活動は無意味なのかと感じてしまう方もいるかと思うが決してそんなことは無い。一つの競技会をとってみても、一度も敗北すること無く大会を終えられるのは、最大でも優勝した 1 チームのみである。そして、たとえ全国優勝を成し遂げたとしても、そこに至る過程の 4 年間で一度も負けなかったチームなど一つも無いだろう。ここで私が述べたいのは、勝利にこだわるためには、敗北を受け入れ、敗北から学ぶという経験を経ることが不可欠であるということだ。体育会以外の大学生活で、勝利や敗北といった経験はほとんどないだろう。もちろん体育会以外の活動でも何らかの試合は行われ、勝ち負けが決する機会もあるだろう。しかし、体育会の部員がその勝敗に至るまでに費やした時間、労力、熱意は、他の活動とは比べようもない。ただ単に負けたわけではない。その敗北が、本気で勝利を得ようと努力した結果であるからこそ、大きな意味を持つのである。

4.3 厳しさに打ち勝つ

この「厳しさ」こそ、大学生活において体育会以外では経験することができないもので、最も学生を成長させるものではないかと思う。体育会の活動の厳しさについて、最も思い浮かびやすいのは、苛酷な練習による肉体的な厳しさだろう。しかし、肉体的な厳しさは体育会活動における厳しさのほんの一端でしかない。体育会の活動では部員に常にさまざまな「負荷」がかけられる。そしてその負荷は学年が上がるに従って、どんどん大きくなる。その中には、時に理不尽とさえ感じられるものすらある。そうした負荷に耐えるには肉体的な強靭さよりも、むしろ強い精神力が必要と

なる。いかなる負荷を課されようとも、歯を食いしばり、それに耐え抜く負けん気や闘志をもった者のみが、4 年間の体育会活動をやりきることができる。一つの試練を乗り越えたとき、得られるものは結果だけではない。その試練に打ち勝ったという事実が自分に対する自信となり、その自信がさらなる試練に立ち向かうための原動力として部員の中に積み重なるのである。さまざまな負荷を乗り越えることで得られる精神的な強さこそが、体育会活動を通して得られる最大の財産ではないかと思う。

5. 理工学部における体育会

前節述べた大学生による真剣なスポーツの利点は理工学部体育会と慶應義塾体育会の双方に当てはまる。そこで本節ではこれら二つの運動団体の違いについて述べたい。しかしながら私は理工学部体育会の部員ではなく、その活動実態について深く理解しているとは言い難いので、これから述べる点はあくまでも慶應義塾体育会の部員として私が感じたことであるという点に注意していただきたい。

理工学部体育会と慶應義塾体育会の違いとして、慶應義塾体育会の「多様性」を挙げたいと思う。藤原工業大学運動部にそのルーツを持つ理工学部体育会はその名の通り理工学部生を中心として活動している団体である。確かに他学部生にも門戸は開かれており、多くの他学部生が在籍してはいるが、理工学部生が占める割合は一般のサークルに比較してとても大きい。また練習場所が矢上であるなど、理工学部生が活動しやすいような環境で活動している場合が多い。これに対して慶應義塾体育会の場合は、慶應義塾の全学部生が在籍しており、理工学部生がマイノリティである部がほとんどである。この部員の多様性によって、同じ学部の同輩からは得ることのできない刺激を得ることができた。例えば大学卒業後の進路が良い例である。理工学部生の場合、ほとんどの学生が大学院へと進学する。しかしながら、文系の学生にとってみると大学院へと進学する者はごくまれであり、ほとんどの学生は就職し社会へと出ていく。そのため彼らは私達よりも早くから自分の将来について考え、自らの進む道を決めていた。私はそのような彼らの姿勢にとても刺激を受けたが、これは理工学部生同士の交友では得られない経験だったと思う。さらにこのような体育会の仲間とは、学校の同級生とは比べものにならないほど多くの時間を共にする。しかも、ただ同じ競技をし、同じ時間を過ごすだけではない。文字通り同じ釜の飯を食い、共に同じ試練へと立ち向かうのである。ここで得られた仲間との絆は一生途切れるものではないと信じているし、永遠に尊重しなくてはならないと思う。

参考までに、慶應義塾体育会で活動している理工学部生の数に関する統計資料を表 1 に示す。毎年約 200 名の理工学部生が塾体育会で活動している。体育会部員の約 10%が理工学部生である。

6. 最後に

今回、この理工学部にとって記念すべき節目の年にこのような文章を書く機会を与えてくださったことに心から感謝の意を表したい。この文章を書くにあたって自分自身の体育会活動を振り返ってみて、この 4 年間にいかに得難い経験をすることができたか再確認できた。日々の活動は本当に辛いことだらけであり、くじけそうになってしまうこともあったが、ここまでやり通すことができて本当に良かったと思っている。これまでの活動を支えてくださった全ての方々に感謝するとともに、慶應義塾及び慶應義塾体育会がさらなる発展を遂げることを切に願うものである。

参照文献

[1] 慶應義塾体育会航空部、『積雲』第 16 号

[2] 慶應義塾、『慶應義塾百年史』中巻（後）、1964.10.20

[3] 慶應義塾体育会航空部ウェブサイト http://keio-soaring.org/

[4] 法政大学体育会航空部ウェブサイト http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Club/2336/

[5] 藤原工業大学、『藤原工業大学開校記念誌』1939.6.17

[6] 藤原工業大学予科会、『藤原工大予科誌』創刊号、1941.12.10

表１　慶應義塾体育会に在籍して活動する理工学部生(2004 ～ 2013 年度)

部　名	2004年度		2005年度		2006年度		2007年度		2008年度		2009年度		2010年度		2011年度		2012年度		2013年度	
柔　　道	8		6	(1)	7	(1)	8	(1)	5	(1)	4		3		4		5	(1)	5	(1)
剣　　道	6		9		14		14		11		9		7		5		6	(1)	6	(1)
弓　　術	16	(2)	15	(2)	17	(2)	20		17	(2)	16	(2)	13	(4)	7	(3)	5	(3)	6	(3)
端　　艇	2		1		1		1		3		4		8	(1)	7	(3)	7	(3)	6	(3)
(カヌー)							1		2		2		1				1			
水　泳（競泳）	5		4		2		2		3		2		1				5	(1)	6	(2)
(飛込)	2	(1)	1		1		1		1											
(水球)	2		1		1		2		2		2		3		2		2	(1)	1	(1)
(葉山)	3	(1)	3	(1)	3	(1)	1		3		3		2		2		2		1	
野　　球	2		5		6		4		4		4		6		6		7		5	
蹴　　球	10	(1)	8	(1)	6	(1)	6		4		5		5		4		5		4	
庭　　球	9	(5)	10	(6)	12	(6)	9	(4)	5	(1)	5	(1)	3	(1)	4	(1)	5	(2)	4	(1)
器械体操	5		7		5		4		4		3		2		4	(1)	2	(1)	3	(1)
競　　走	18	(1)	17	(1)	14	(1)	12	(1)	9	(1)	12		17	(1)	19	(1)	21	(1)	21	(1)
馬　　術			1		3		2		1		3	(2)	1	(1)	1	(1)	3	(3)		
ホッケー	2		2														1	(1)	1	(1)
相　　撲	1		1		1		1		2		3		1		1		1			
山　　岳	2		4		3		3	(1)	4		3		3		3		5		7	
ソッカー	9		6		9	(2)	6		5	(1)	4	(1)	6	(2)	8	(1)	8	(1)	11	(3)
スケート(ｽﾋﾟｰﾄﾞ)			1		2	(1)	2	(1)	1	(1)	1	(1)								
(ﾌｨｷﾞｭｱ)	2	(1)	1		2	(1)	1	(1)	2	(2)	2	(2)	1	(1)						
(ﾎｯｹｰ)	2		3		2		2		3		3		3		6	(1)	5	(1)	4	(1)
バスケットボール	5	(3)	8	(6)	11	(8)	11	(7)	5	(4)	3	(3)	1	(1)	2	(1)	3	(2)	2	(1)
スキー																			1	
空　　手			1		2		3	(1)	3	(1)	2	(1)	4	(3)	2	(1)	4	(1)	2	
卓　　球	4		4		4		7	(1)	6	(1)	8	(3)	6	(3)	2	(2)	2	(2)	2	
ヨット	4	(1)	3	(1)	2	(1)	2	(1)	2		4		6		5		5		3	
射　　撃	6		7		10		11	(1)	7	(1)	12	(2)	14	(2)	13	(1)	14	(1)	12	
バレーボール	5		4		4	(2)	4	(1)	6	(2)	5	(2)	4	(2)	4	(2)	3	(1)	3	(1)
レスリング	1		1		1		4		2		3		1		2	(1)	2	(1)	7	(1)
ボクシング	2		1		2		3		4		4		5		1		1		1	
ｱﾒﾘｶﾝﾌｯﾄﾎﾞｰﾙ	5		5		6		9		9		10		8		9		8		5	
ハンドボール	2	(1)	3	(1)	1	(1)	2	(1)	4	(1)	6	(1)	5		7	(1)	6	(2)	4	(3)
フェンシング	1		2		4		3		5	(1)	5	(1)	2	(1)	3	(1)	4		3	
ソフトテニス	7	(1)	8	(1)	8	(1)	9	(1)	10	(1)	13	(1)	12	(1)	11	(3)	7	(2)	4	(2)
バドミントン	4		4		8	(1)	6	(1)	7	(1)	8	(1)	5		6		5		4	
自動車	8		10		9		7		9		10		10		11		11		9	
準硬式野球	3	(1)	1								1		3		4		5		5	
重量挙	1		1		2		4		3		5		3		2		1		4	
航　　空	8		8		8		7		4		5		8		7	(1)	12	(3)	11	(4)
ゴルフ	2	(1)	3	(1)	3	(1)	3	(2)	4	(1)	3	(1)	3	(1)	3		2		4	(2)
合氣道	19	(1)	16	(2)	17	(2)	13	(2)	8	(1)	10	(1)	6		5	(2)	6	(2)	6	(2)
洋　　弓	3	(1)	4	(1)	4	(1)	10	(2)	13	(2)	17	(3)	18	(3)	12	(2)	11	(2)	14	(1)
少林寺拳法	4	(1)	5		6		5		3		4		6	(1)	9	(2)	7	(1)	4	(1)
拳　　法	4		3		1		2		1		1		2				1		1	
ラクロス									6	(1)	6	(1)	2		4	(3)	4	(2)	4	(2)
計	204	(23)	208	(25)	224	(34)	227	(30)	212	(27)	235	(30)	220	(29)	207	(35)	220	(42)	206	(39)

（ ）内は女子で内数